前田利常公灰塚

石川県立埋蔵文化財センター

１９９３

例　言

1．本書は石川県小松市埴田町地内に所在する前田利常公灰塚の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は道路建設課施行の県土幹線軸道路整備（加賀産業開発道路）事業に係わるもので、同課の依頼を受け石川県立埋蔵文化財センターが実施した。調査および報告書に係る経費は、すべて道路建設課が負担した。

3．発掘調査は平田天秋（石川県立埋蔵文化財センター調査第一課長）の指導のもとで本田秀生（石川県立埋蔵文化財センター主事）、浜崎悟司（石川県立埋蔵文化財センター主事）が担当し、田畑　弘（石川県立埋蔵文化財センター調査員）の補助を得た。現地調査の期間は平成２年５月１日から５月30日、調査面積は約120m²である。

4．発掘調査の実施に当たっては石川県道路建設課、小松土木事務所、広井獣医科医院、小松市埴田町の協力を受けた。

5．出土遺物の整理事業は、平成４年度に社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。また、出土遺物の写真撮影は、大藤雅男（石川県立埋蔵文化財センター調査員）が行った。

6．本書の執筆編集は本田が行った。

7．発掘調査で得られた当遺跡の記録資料、および出土品は石川県立埋蔵文化財センターが一括して保管している。

目　次

第１章　遺跡の位置と環境……1
第２章　調査の経緯と経過……2
第３章　遺構と遺物……2
第４章　まとめ……6
写真図版……15

第１章　遺跡の位置と環境（第１・２図）

第１節　遺跡の位置

前田利常公灰塚は小松市埴田町地内に位置する。小松市は石川県南西部に位置し県内第２の人口を擁するが、埴田町は市街地の発達する平地部から南東にあり、ちょうど丘陵地帯が始まる辺りに位置する。集落の南には、白山連峰の大日山系に源をなす梯川がある。梯川は、この付近で谷を抜け、西に大きく流れを変え、東方の小松東部丘陵から派生する台地（通称古府台地）の南縁を、蛇行しつつ西流している。灰塚はこの古府台地のもっとも標高の高い辺りに築かれている。このあたりからは江戸時代小松城の置かれた市街地を一望できる。周辺は水田、畑地、山林が広がっており、市街地とは対照的な景観を見せるが、近年になり開発の手がこの地まで延びている。その急先鋒となったのが今回の調査の原因でもある加賀産業界発道路である。

第２節　周辺の遺跡

周辺には地形的環境から古くからの人間の活動の跡が残されている。

岩宿時代の遺跡としては河田山古墳群の調査の際に、県内では初めての翼状剥片を含む石器群が発見されている。縄文時代では古府丘陵上でも遺跡が確認されているが、梯川を挟んだ対岸の丘陵裾部にある軽海西芳寺遺跡の発掘調査が実施されその内容が明らかになっている。中期後半の集落遺跡で炉跡等が検出されている。

弥生時代では佐々木ノテウラ遺跡等でその初頭の土器が散発的に確認されるのみで、それ以降もはっきりしない。後期にはいると遺跡は増加する様である。発掘調査された遺跡を見ると低地部では、佐々木アサバタケ遺跡があり、丘陵上では河田山古墳群の調査で当該期の高地性集落が確認されている。古墳時代では集落跡は亀山玉造遺跡や荒木田遺跡があるが、この時期は丘陵上に造営された古墳が目立つ。前期から後期におよぶ古墳が確認されている河田山古墳群を筆頭に埴田後山明神古墳群、埴田山古墳群、八幡大塚、八塚古墳群等古府台地を取り囲むように古墳群が展開している。

古代にはいると低地部に再び集落跡が目だつようになるが、時期的には平安中期以降の遺跡が殆どである。低地部の佐々木ノテウラ遺跡、佐々木アサバタケ遺跡の他に古府台地上では加賀国分寺の想定もなされる十九堂山遺跡や、丘陵西方の低地部には加賀国府に想定されている古府しのまち遺跡がある。また、丘陵東方の丘陵地には山中寺院の確認された里川Ｅ遺跡がある。中世では佐々木ノテウラ遺跡、佐々木アサバタケ遺跡等の集落跡の他に仏生寺跡、西芳寺跡、軽海中世墳墓群、十九堂山中墳墓群などがある。近世では小野窯跡が知られる他、今回の前田利常公灰塚がある。

第２章　調査の経緯と経過

第１節　調査にいたる経緯

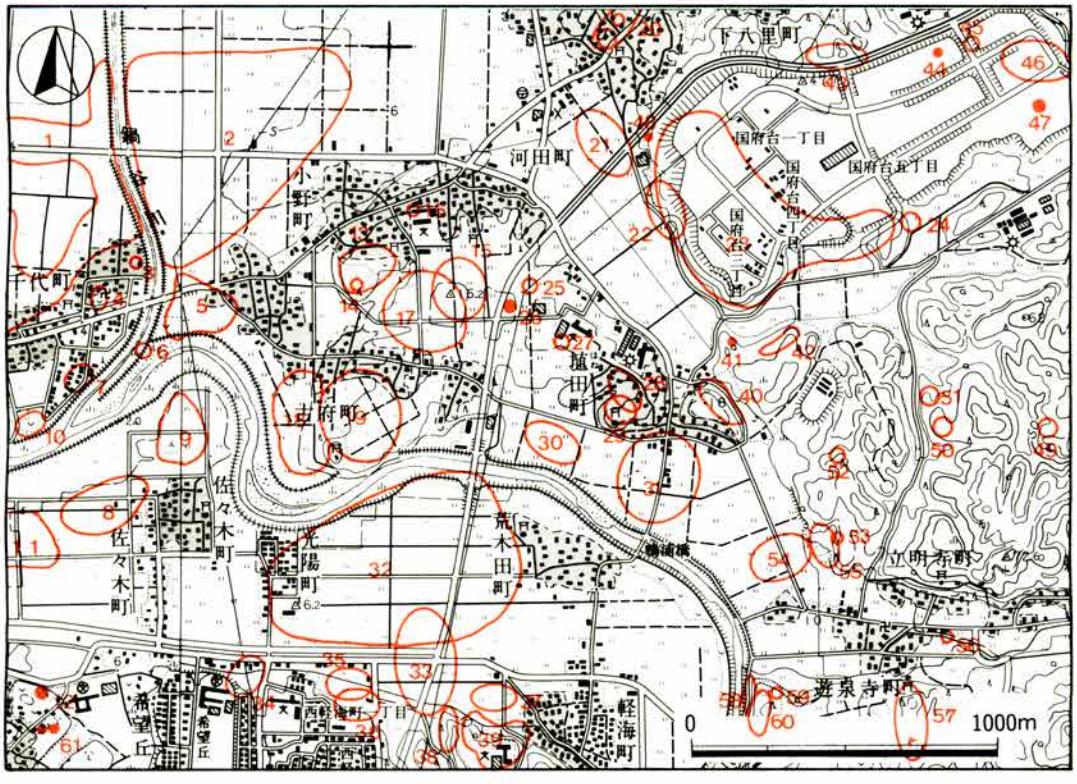
加賀産業開発道路（以下産業道路と略す）は、昭和48年頃から建設が進められてきた。昭和60年には野々市町新庄から小松市東山間がほぼ開通した。その後の交通量の増加に対応するため県土幹線軸整備の一環として４車線化拡幅工事が進められてきた。小松市河田地内から軽海地内の区間については、石川県小松土木事務所の依頼により昭和63年に遺跡の分布調査が石川県立埋蔵文化財センターにより実施されている。このときは踏査、あるいは重機を使用して、埴田町地内では前田利常公灰塚、虫塚、荒木田町地内では荒木田遺跡の存在が確認された。平成元年には遺跡の範囲を確認するめ、重機を用いた試掘調査が実施され、前田利常公灰塚については長さ約30m、幅約12mの範囲について発掘調査が必要と判断された。これを受け小松土木事務所から発掘調査依頼が出され、発掘調査を実施することとなった。平成２年度に入り現地を確認すると、調査範囲とされた内約２分の１が交差点の左折車線として供用されており、調査対象から除外することとなった。

第２節　調査経過

発掘調査は同年５月１日から開始した。重機により表土を除去し、遺構の検出を開始すると、遺構の上面は開墾等によりすでに削平され、また、土取り穴などで大きく攪乱されていることが判明したが、調査区東側の壁に沿って一本の溝状遺構が途中一箇所で途切れる状態で検出された。５月中旬ごろからこの溝状遺構の掘り下げを開始した。中からは陶磁器類、窯道具、ガラス瓶などや木の根株が出土するのみで、その性格は理解できなかったが、掘り下げを進める内に、この溝状遺構は中央に陸橋を持つ前田利常公灰塚の壕ではないかと想定された。５月下旬からはこの想定を考えるために灰塚全体の測量調査を並行して実施した。この結果、灰塚は外周に壕を巡らせた一辺約30mの方形区画を形成し、壕の内側には土塁を巡させ、その中央に径約15mの塚を築いていたことが判明した。５月30日までに測量調査もおわり、５月31日に現地調査を終了した。

第３章　遺構と遺物（第３～９図、図版第３～８）

検出された遺構は灰塚の西辺の壕のみである。中央には幅４ｍの陸橋部を有する。壕の全幅は確認していないが、灰塚の測量からすると幅３ｍ程と思われる。深さは検出面から約１ｍ、最深部で1.2mである。覆土は多種多様な層があるが、腐食物を多量に含む層が多い事。埋め戻された可能性がある。また、２～３回掘り返された痕跡が窺える。



第１図　調査地(26)と周辺の遺跡（S＝1/2500）

第２図　発掘調査・測量地区と加賀産業開発道路（1/5000）

表1　周辺遺跡地名表

No	名　　称	所　在　地	種別	現　　状	時　　代	備　　考
1	千代オオキダ遺跡	小松市千代町	散布地	田	奈良～中世	
2	古府しのまち遺跡	小松市古府町千代町	集落跡	田	古墳前期～平安	1973年県・市教委・1988年市教委　1989年県埋文センター発掘調査
3	小野町遺跡	小松市小野町	散布地	河川提防	古墳	
4	千代城跡	小松市千代町	城　跡	境内・田・道路	室町	
5	古府遺跡	小松市古府町	集落地	田・宅地	平安中期	1984年県埋文センター発掘調査「小松市古府遺跡」1987
6	フドンド遺跡	小松市古府町	散布地	田	平安	
7	横地遺跡	小松市千代町	散布地	提防	縄文	
8	佐々木ノテウラ遺跡	小松市佐々木町	集落地	田	弥生～中世	1984年県埋文センター発掘調査
9	佐々木アサバタケ遺跡	小松市佐々木町	集落地	田・畑	弥生～中世	1984・85年県埋文センター発掘調査
10	千代本村遺跡	小松市千代町	散布地	提防・田	古墳	
11	佐々木遺跡	小松市佐々木町	集落地	田	平安	
12	八幡大塚古墳	小松市八幡町	古　墳	宅地・畑・道路用地	古墳	現況は一辺40m程度の方墳状をなすが、前方後円墳の可能性あり
13	十九堂山遺跡	小松市古府町	寺院跡	田・畑	平安・中世	
14	十九堂山中世墓群	小松市古府町	墳　墓	畑	中世	遺構の一部は消滅
15	小野スギノキ遺跡	小松市小野町	散布地	田	平安・中世	
16	波佐谷城跡	小松市波付谷町	城　跡	山林	室町	
17	小野遺跡	小松市小野町	散布地	田	平安	
18	古府シマ遺跡	小松市古府町	散布地	田・宅地	平安・中世	
19	南野台遺跡	小松市古府町	散布地	田・畑	縄文中期、古墳	耕地整理の際損壊
20	谷内横穴	小松市河田谷内町	横穴墓	宅地	古墳	奥行2.3m・巾2.0m・高1.8m
21	河田C遺跡	小松市河田町	散布地	田	不詳	
22	河田B遺跡	小松市河田町	散布地	田・畑・道路	奈良	
23	河田山古墳群	小松市国府台	古　墳	宅地・公園	古墳前期～後期	1986・87年市教委発掘調査
24	河田山窯跡	小松市河田町	窯　跡	山林	不詳	窯体断面露出
25	埴田ミヤケノ遺跡	小松市埴田町	散布地	畑	不詳	
26	前田利常候灰塚遺跡	小松市埴田町	塚	公園	江戸	今回報告
27	埴田ミヤンタン遺跡	小松市埴田町	散布地	畑	不詳	
28	宮谷寺屋敷遺跡	小松市埴田町	散布地	畑	縄文・室町	
29	埴田フルカワ遺跡	小松市埴田町	散布地	社地	古墳	
30	埴田ウラムキ遺跡	小松市埴田町	散布地	田	平安・中世	
31	埴田遺跡	小松市埴田町	散布地	田	奈良・平安	
32	荒木田遺跡	小松市荒木田町	散布地	田・道路	古墳～中世	
33	軽海西芳寺遺跡	小松市軽海町荒木田町	集落跡	田・道路	縄文中期～中世	1984年県埋文センター発掘調査

No	名　　称	所　在　地	種別	現　　状	時　　代	備　　考
34	大谷口遺跡	小松市軽海町	散布地	下水処理・宅地	弥生後期	
35	軽海遺跡	小松市軽海町	散布地	田	弥生～近世	1985年県埋文センター発掘調査
36	亀山玉造遺跡	小松市軽海町	集落跡	宅地・公園	古墳前期	1971年市教委発掘調査
37	西芳寺遺跡	小松市軽海町	寺院跡	田	平安・中世	1979年県埋文センター発掘調査
38	軽海中世墓群	小松市軽海町	損　墓	山林	鎌倉末期～室町	1972年市教委発掘調査
39	軽海廃寺	小松市軽海町	寺院跡	雑木林	平安後期	
40	埴田後山明神1号墳	小松市埴田町	古　墳	畑	古墳	円損農道造成のため破壊
	埴田後山明神2号損	小松市埴田町	古　墳	畑	古墳	円墳・1924年遺物出土
	埴田後山明神3号墳	小松市埴田町	古　墳	畑	古墳	円墳、1982年市教委発掘調査
	埴後山山無常堂古墳	小松市埴田町	古　墳	畑	古墳	円墳、1982年市教委発掘調査、主体部の他に粘土槨の施設伴う
42	埴田山1号墳	小松市埴田町	古　墳	山林	古墳	円墳
	埴田山2号墳	小松市埴田町	古　墳	山林	古墳	円墳
43	下八里横穴群	小松市下八里町	横穴墓	道路法面	中世	1988年市教委発掘調査 1990年道路工事中発見4基以上
44	穴場横穴	小松市上八里町	横穴墓	山林	古墳	
45	上八里C遺跡	小松市上八里町	散布地	工業団地	奈良	1987年分布調査による発見
46	上八里横穴墓群	小松市上八里町	横穴墓	山林	不詳	
47	上八里1号窯跡	小松市上八里町	窯　跡	山林	不詳	
48	河田横穴	小松市河田町	横穴墓	山林	不詳	
49	里川D遺跡	小松市里川町	散布地	ゴルフ場	縄文中期	1990年市教委発掘調査土抗1基検出
50	里川E遺跡	小松市里川町	寺院跡	ゴルフ場	平安	1990年市教委発掘調査礎石建物掘立柱建物石垣等
51	里川F遺跡	小松市里川町	寺院跡	山林	平安	1989年分布調査により発見、現状保存
52	里川G遺跡	小松市埴田町	塚	丘陵	中世	径11.0m、高0.5m
53	隆明寺跡	小松市軽海町	寺院跡	畑	平安初期	
54	遊泉寺・クボタA遺跡	小松市遊泉寺町	散布地	田	平安～中世	
55	遊泉寺・クボタB遺跡	小松市遊泉寺町	散布地	山林・田	平安～中世	
56	涌泉寺跡	小松市遊泉寺町	寺院跡	田	平安初期	
57	宮の奥1号経塚	小松市遊泉寺町	経　塚	山林	平安～鎌倉	径6m、高0.48m
	宮の奥2号経塚	小松市遊泉寺町	経　塚	山林	平安～鎌倉	径7m、高0.67m
	宮の奥3号経塚	小松市遊泉寺町	経　塚	山林	平安～鎌倉	径7m、高0.67m
58	遊泉寺遺跡	小松市遊泉寺町	散布地	山林・田	縄文	
59	仏生寺塚	小松市遊泉寺町	経　塚	山林	中世	
60	仏生寺跡	小松市遊泉寺町	寺院跡	山林	中世	
61	八幡行者塚古墳	小松市八幡町	古　墳	畑・道路用地	古墳	1993年県埋文保存協会発掘調査 円墳径18～22m切石積横穴式石室
	八幡2号墳	小松市八幡町	古　墳	畑・道路用地	古墳	円墳径14m

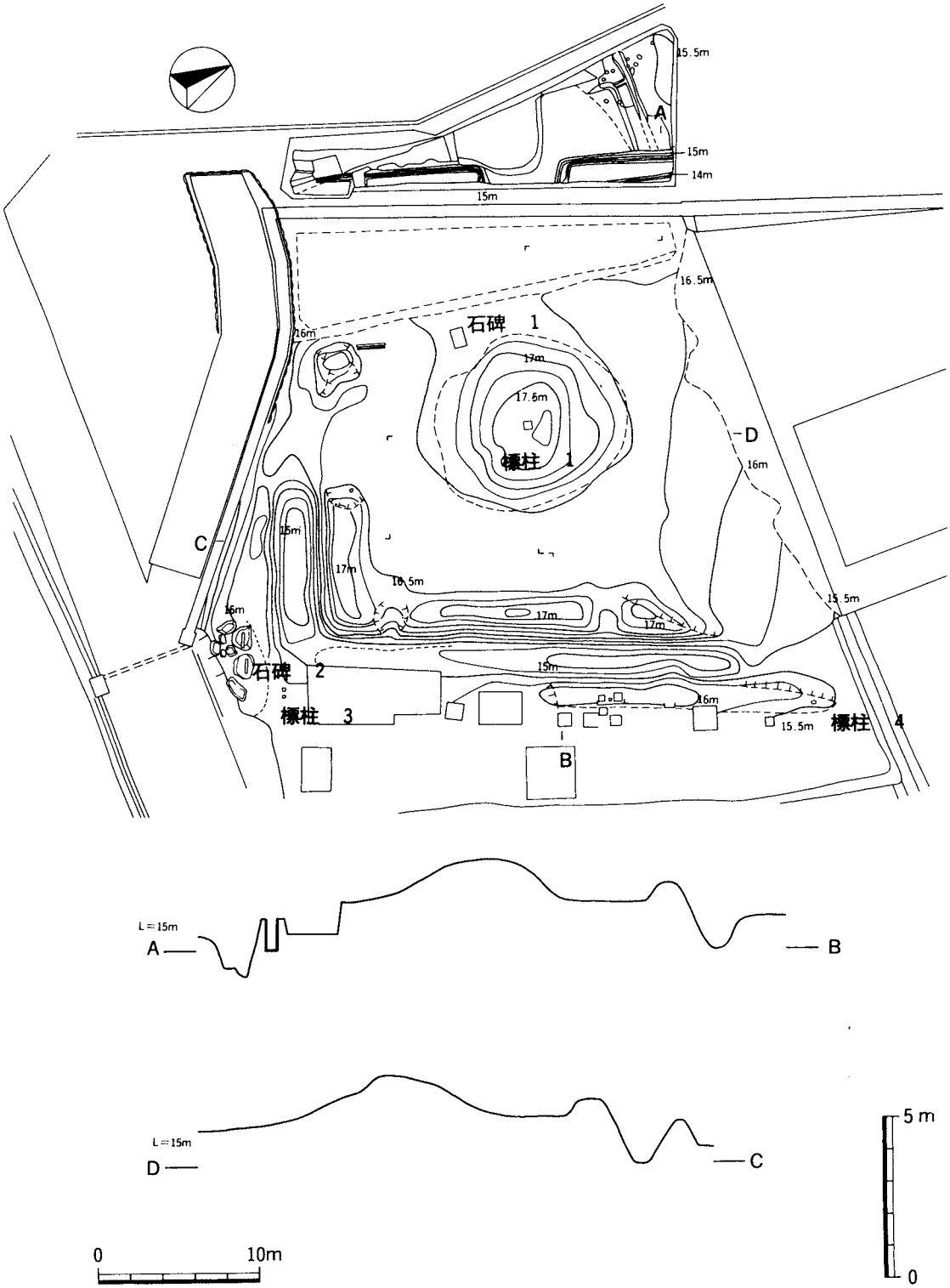
壕から出土した遺物は陶磁器類、窯道具、瓶類、石製品などがある。磁器には碗皿類、鉢などがある。58は焼成されていない。窯道具は形態、法量ともかなりのバリエーションがある。基本的には、盤状のもの(6～12)、皿状のもの(13～28、32～39)円環状で断面が盤状のもの(48～52)、円環状で断面が逆L字状のもの(40～47)、支脚状のもの(29)がある。盤状のもの、皿状のもの、支脚状のものの底面には糸切り痕を残すものがあり、皿状のものの内22～24には押印(22)、ヘラ記号(23、24)が見られる。また、皿状のものの内30～39には、内面に上面が平担な段を1、2段設けている。53の陶器のオイルボトルには摂津酒造の押印があり酒瓶であろうか。54のガラス瓶は茶色のガラスが使用されている。薬品類を入れたものであろうか。EARTHの文字がみられる。54の瓶は青色のガラスが用いられ、口縁には一対の凹みが設けられている。53、54ともに現在ではみられないものである。第9図4は煉瓦である。窯の構造物と思われる。石製品は第9図2を除いて凝灰岩製である。第9図1は表裏に工具痕が残る。第9図5は何かの台と思われるがはっきりしない。陶磁器類に一部19世紀まで遡る可能性を持つものがあるものの、多くは近代から現代のものであろう。

灰塚は測量調査からすると壕と土塁で方形の区画を成し、その1辺は、壕の内側で約30mである。壕は地表面から約2m程度の深さで前述した様に西辺の中央部に幅約4mの陸橋部を有する。土塁は1m以上の高さを有し、底面で1.5mほどの幅を持つものと思われる。この区画の中央に径15m、高さ1.5m以上の塚を築いている。壕、土塁、塚共に大きく損傷を受けており、土塁は南東コーナー部にL字状に残存するのみである。壕も南側を地下道で、北側を宅地で壊され、塚も不整円形となってしまっている。

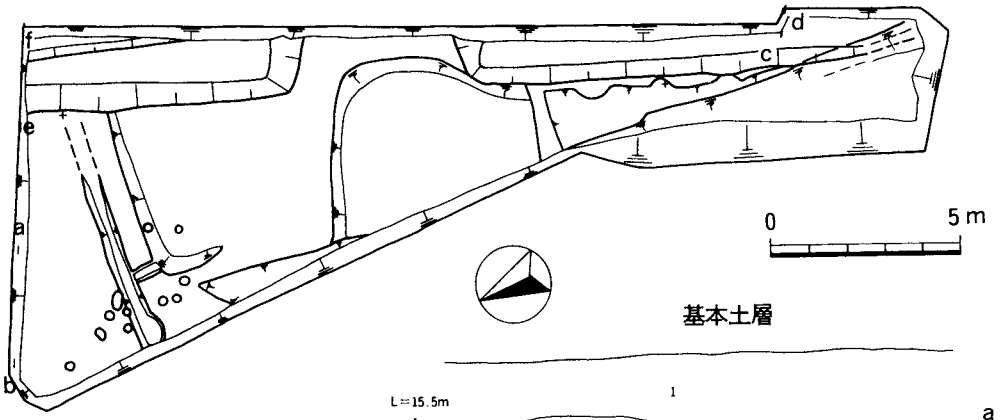
第4章　まとめ

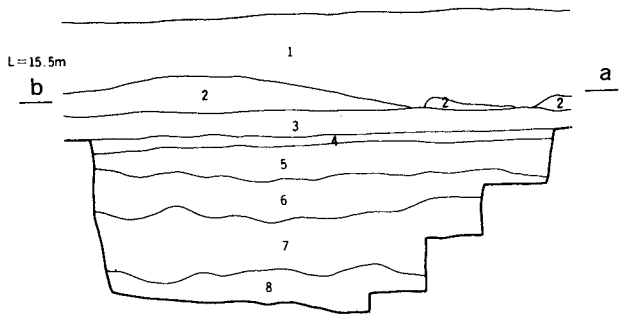
国府村史によれば、万治元年十月小松において逝去した第三代加賀藩主前田利常の遺骨は高野山天徳院に納入され、その残余を灰塚に納めた。墓地は方百間で前後にお花杉を植え、西方小松に面して長い参道があったとされている。また、清掃役に河田村吉川氏が世襲として守られてきたともされている。昭和26年に土地整理のため村が前田家より墓地の払い下げを受け、村は塚の周囲を保存して「加越能国主従二位前田利常公灰塚の跡」と刻まれた石碑を建立した。この間近郷の人々はこの地に参拝し柵内は禁足され、「地域の雑木一本たりとも手折ったならば、曲事」とされている。

今回の調査で確認した壕はとても清掃されていたとは言いがたい状態であった。とすれば、今回の調査で出土した遺物は、この地の禁足が解かれた後のものであろうか。昭和29年に前田家当主利建氏を招いて石碑の除幕式を行ったとされていることからこれ以降であろうか。ただし、一部には19世紀まで遡る可能性を持つものがあり、また、当時の清掃の状態の不明であるので一概には判断できない。出土遺物は窯道具が多く含まれる事や口縁に融着痕の残る磁器資料があることからして、近在の窯業者の廃棄したものであろう。

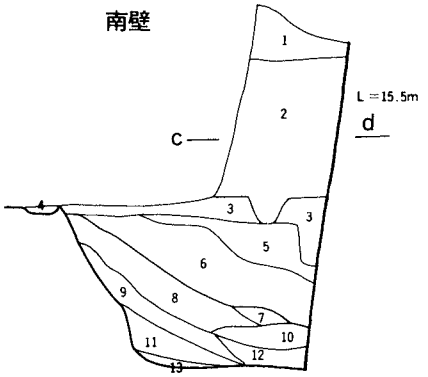


第３図　前田利常公灰塚測量図（Ｓ＝1/400）（断面の垂直方向は1/200）



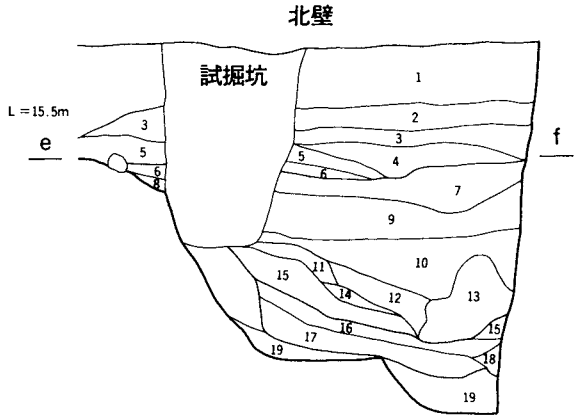


1．盛土
2．茶褐色砂質土
3．茶灰色粘質土
4．黄褐色粘質土（床土）
5．黄褐色粘質土
6．黄灰色粘質土
7．灰白色粘質土
8．灰白色粘土



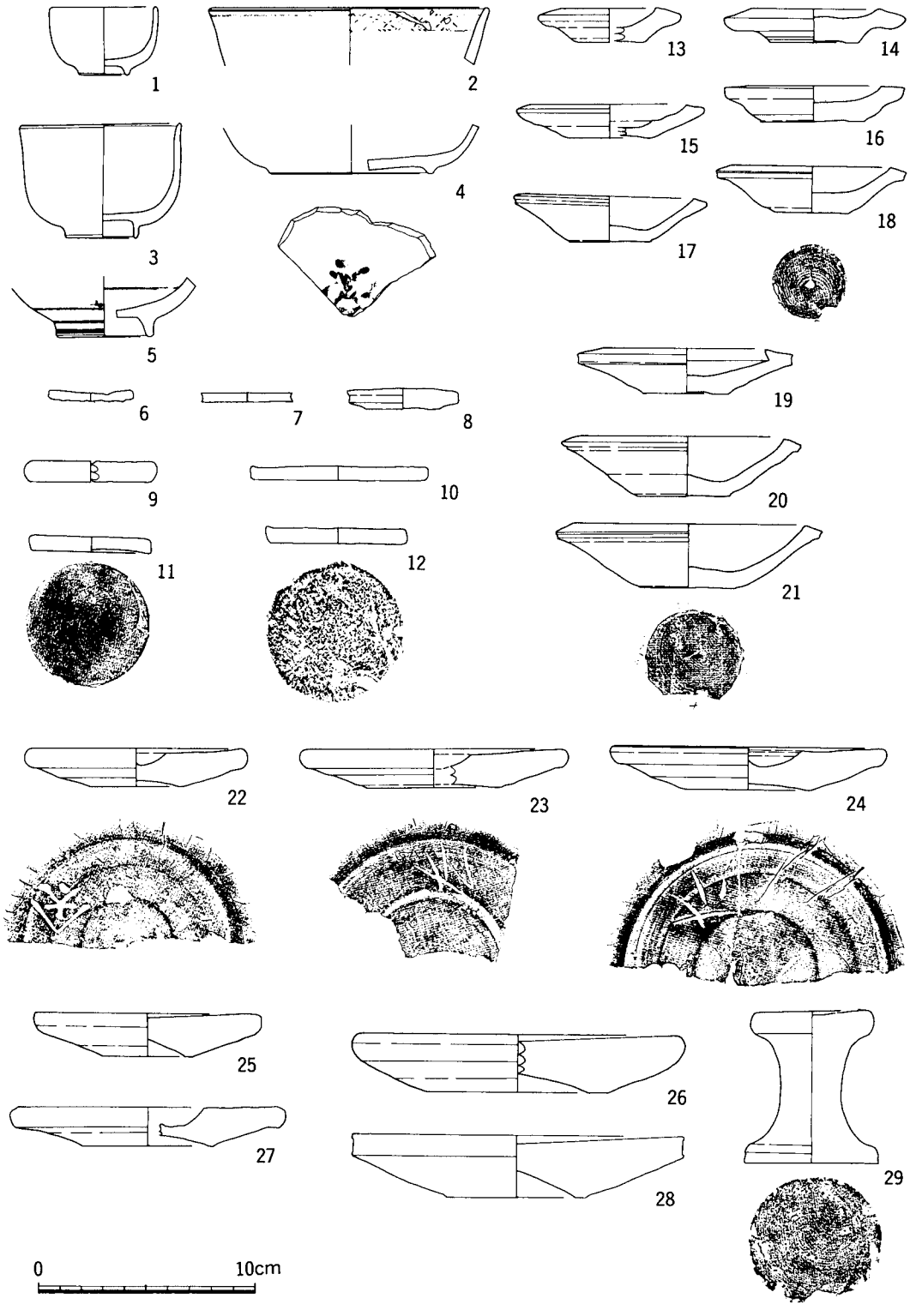
1．黄灰白色砂質土
2．黄褐色砂
3．黒灰色土
4．濁茶灰色土
5．茶灰色粘質土
6．灰褐色粘質土
7．淡褐色砂質土
8．暗灰色腐植土
9．黄灰色砂粘質土
10．黒褐色腐植土
11．淡黄灰色砂粘質土
12．淡黄灰色粘質泥土
13．黒色粘質土

1．黄灰白色砂質土
2．暗茶灰色粘質土
3．茶褐色粘質土
4．暗茶灰色粘質土
5．茶灰色粘質土
6．暗灰色粘質土
7．濁暗灰色粘土
8．黄褐色粘質土
9．濁黒灰色粘質土
10．濁青灰色粘土
11．濁茶灰色砂質土
12．黒灰色砂質土
13．茶灰色粘質土
14．青灰色粘土
15．濁青灰色粘土
16．黒灰色粘質土
17．茶灰色粘質土
18．濁青灰色粘土
19．淡灰色砂質土
20．黄褐色粘質土

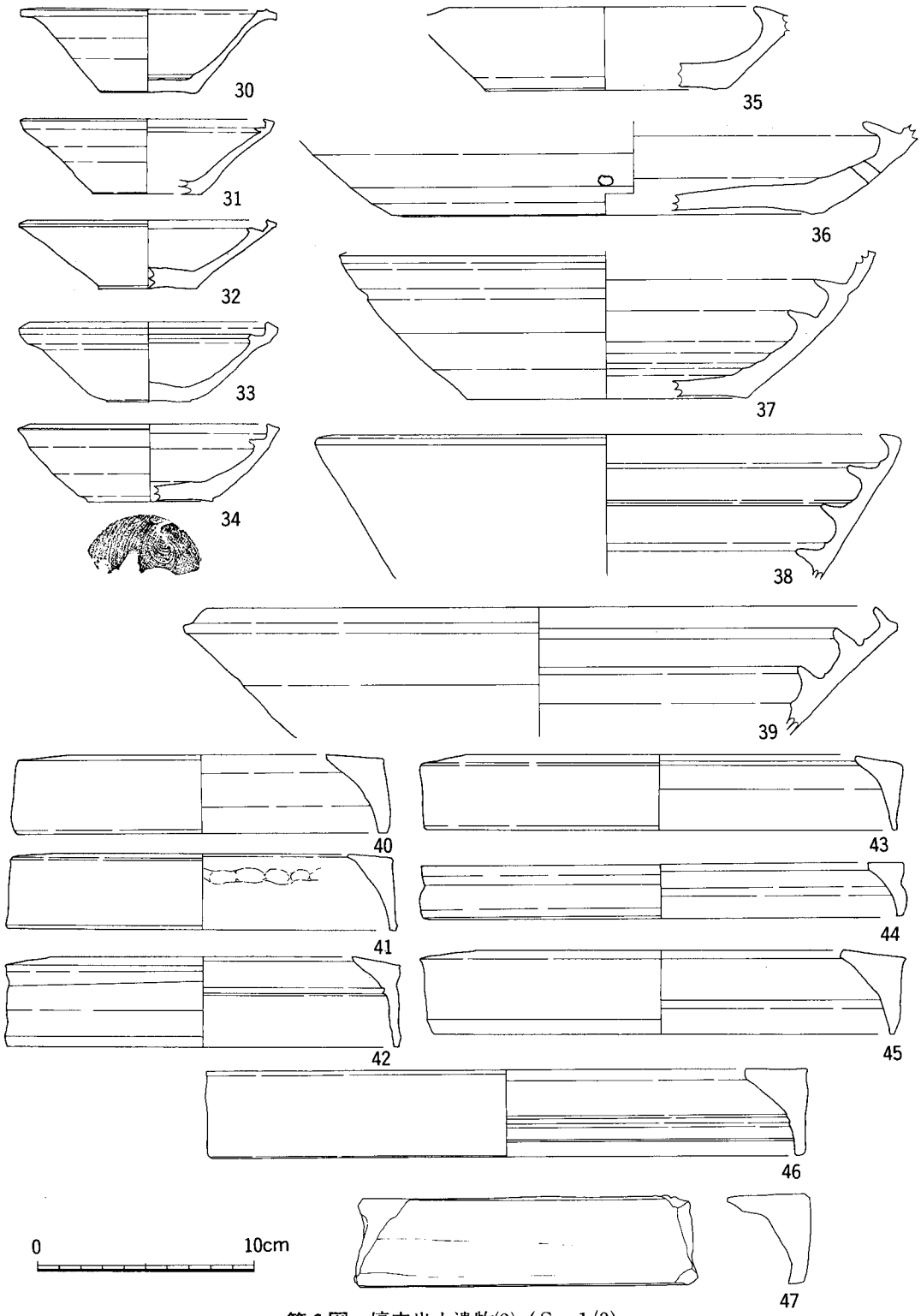


0　1 m

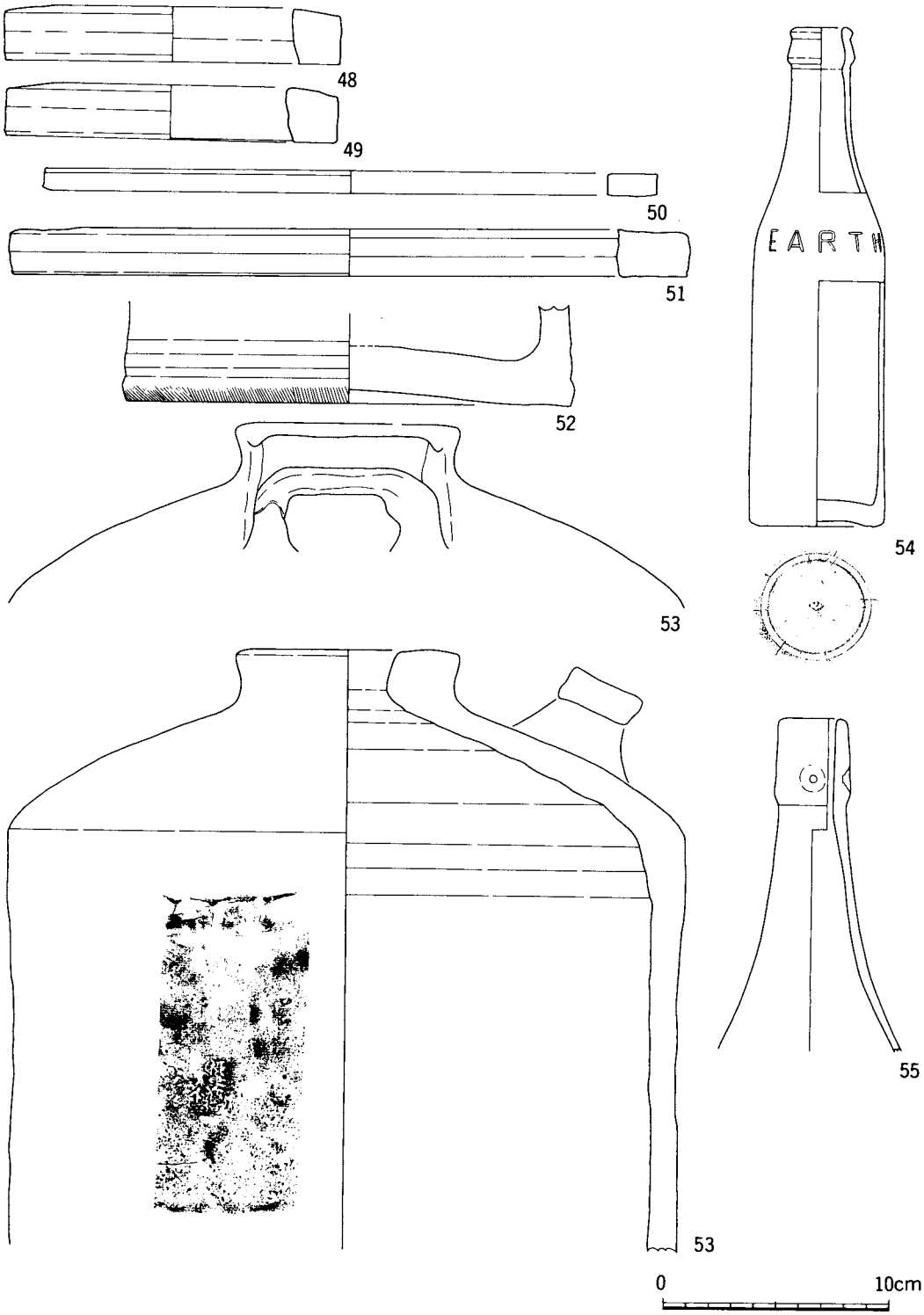
第4図　調査区平面図（S＝1/200）・基本土層図（S＝1/40）・壕土層断面図（S＝1/40）



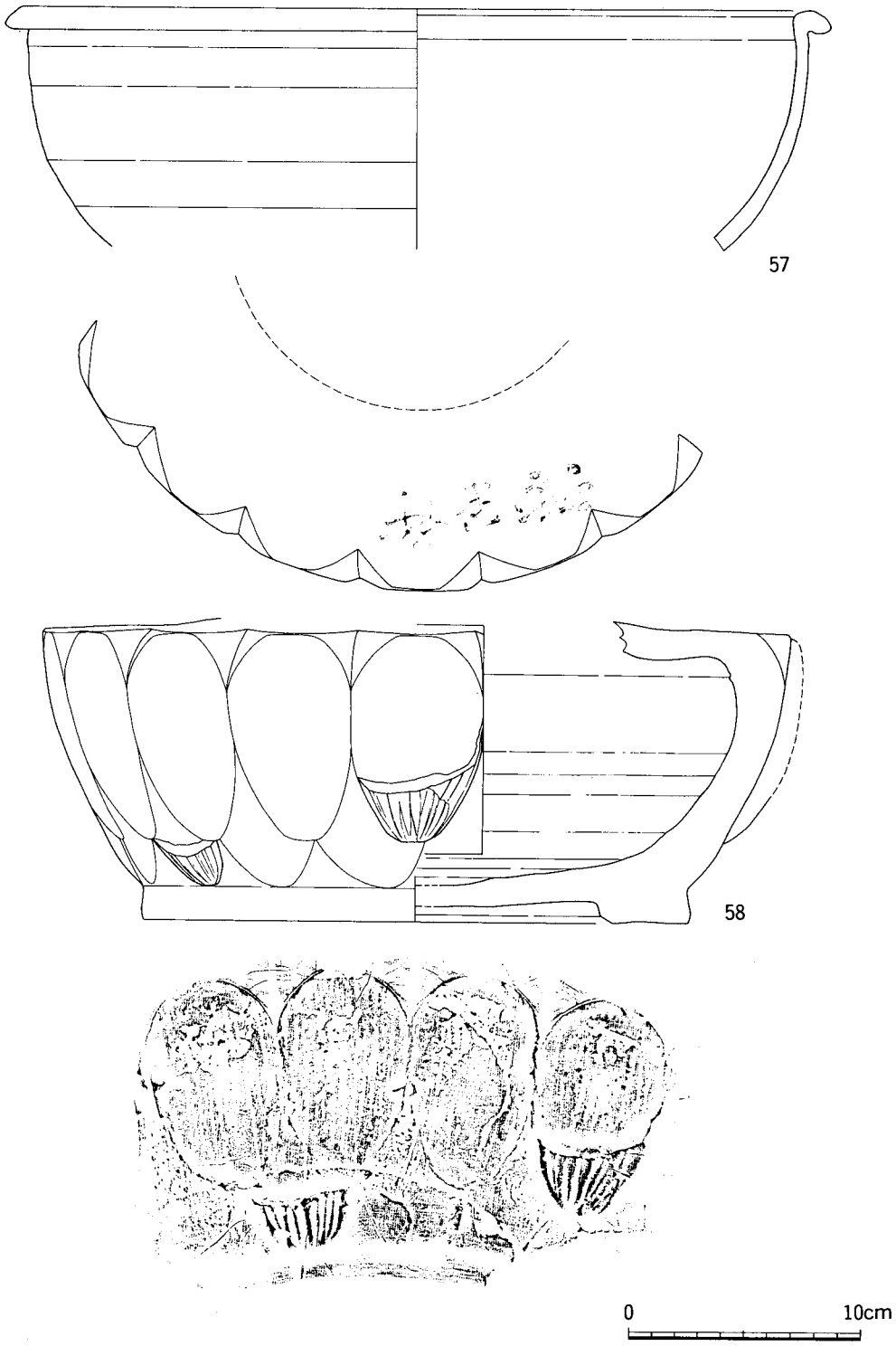
第5図　壕内出土遺物(1)（S＝1/3）



第6図　壕内出土遺物(2)（S＝1/3）



第７図　壕内出土遺物(3)（S＝1/3）



第8図　壕内出土遺物(4)（S＝1/3）

第９図　壕内出土遺物(5)（S＝1/4）

引用・参考文献

樫田　誠他　1988　『後山無常堂古墳・後山明神３号墳』　石川県小松市教育委員会

北野博司他　1986　『佐々木ノテウラ遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

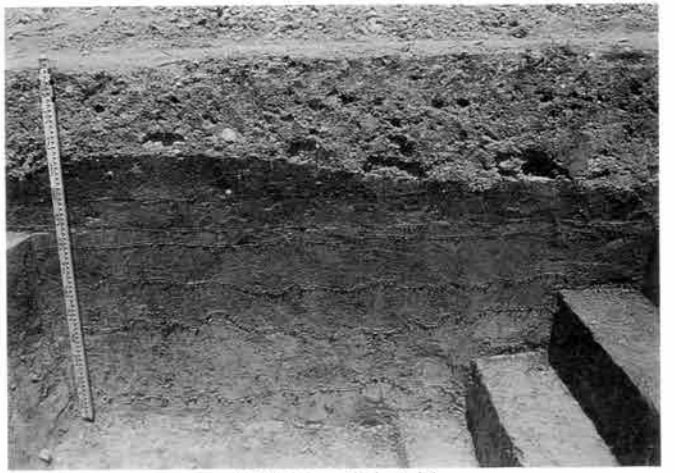
国府村誌編纂委員会　1956　『国府村史』

田嶋明人他　1986　『漆町町遺跡』Ⅰ　石川県立埋蔵文化財センター

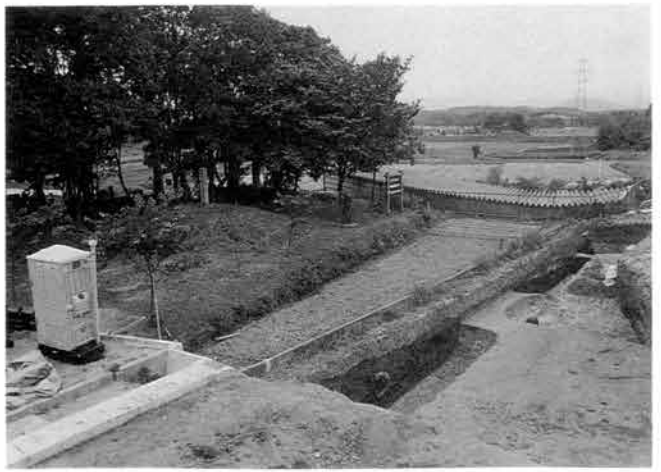
米沢義光　1987　『小松市古府遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

図版１　前田利常公灰塚全景

図版 2　作業風景



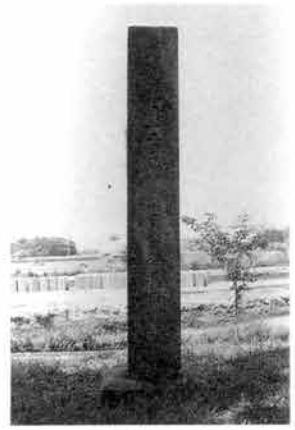
図版 4　基本土層



図版 3　発掘調査区全景

図版 5　周溝土層堆積状況

図版6　標柱・石碑



標柱　1

石碑　1

標柱　3

標柱　4

標柱　2

石碑　2

図版 7　壕内出土遺物(1)

図版 8　壕内出土遺物(2)

前田利常公灰塚

県土幹線軸道路整備（加賀産業開発道路）に係る
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

平成5年3月31日発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉4丁目133番地
電話（0762）43—7692番

印　　刷　株式会社橋本確文堂
石川県金沢市増泉4丁目10番10号

©石川県埋蔵文化財センター1993